
続・小さな恋

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続・小さな恋

【ZPDF】

Z0163D

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

親友と付き合い始めた幼馴染の春樹。不意に僕に告白して来た春樹の親友の椿。それは、また、新たな悲しい物語の始まり。『小さな恋』を読んでからの方が、良く話が分かると思います。

(前書き)

『小さな恋』の続編です。

先に、そつちを読まないと、分かりにくいかも、です。
それと……

これは、主人公のための『都合主義』です。
かなり、樂観的因素が含まれて居ますので、そういうのが、ダメな
人は見ないほうがいいかも、です。

彼女が彼と付き合い始めてもう二週間が経った。
本当に本当に嬉しそうで幸せそうな顔をしている。

僕はその顔を見るのがつらい。

心臓のあたりがきりきり痛み、動悸が乱れ、何も考えられなくなる。
どうしても僕は彼女のそばにいたくて。
どうしても彼女と晴れたくないで。

だから、自分の心を押し殺したというのに、今は彼女と居るのがつ
らい。

彼女の笑顔が見たくない。

彼女の声が聞きたくない。

だって、その彼女の笑顔は全部……

僕の親友からの贈り物だから。

だから、見たくない。

全然見たくなんかない。

僕は、彼女とはなれることにした。

すべてが遅かった。

そして、すべてが間違いだつた。

こんな思いをするなら、最初から吉田でも何でもしていれば良かつ
た。

そうすればこんな思いを抱かずにすんだ。

こんな、壊れそうなところまで追い詰められなくても良かつた。

僕は、今病院に居る。

理由はただひとつ。

両親が僕の様子がおかしいのに気がついたからだ。

最近はご飯もまともに食べてない。

おかげで、体重も一気に減った。

まあ、夏場だから、夏ばてだと通したけど、そんな子供くさい言い

訳が通用するわけもない。

今は何も言わないけど、せつとひどくなつたらきっと聞く。

だけど、なんと答えればいい？

まさか、彼女に、春樹^{はるき}に恋人^{はない}ができたからとでも言えとこいつのか？

そんなことができるわけがない。

僕は自分の気持ちを押し殺して、彼女を応援したのだ。

だから、全部自分で背負わなくちゃいけない。

それが、間違いを犯した僕のけじめだ。

診察を終えた僕は、家に帰ると、部屋に戻り、ベッドの上に倒れこむ。

ここ最近はずつとそうだ。

家に帰つてくると部屋に閉じこもる。

じやないと、家族に当り散らしそうでいやだった。

それに、もしかすると、眠れるかもしれない。

そうも思つていた。

いつの間にか、僕は変わつてしまつた。

大嫌いだつたはずの夜が今はなぜか、たまらなく愛しい。

まるで僕の心を写しているかのように感じじる。

今の僕の心は何もない。

ただ、ひつそりと黒い虚無感だけで満たされている。

そして、彼女の顔を見るたびにその虚無感に、悲しみとこいつ炎がともる。

僕はどうすればいいのだろう？

彼女と離れて、僕は何をすればいい？

何をしなければいけない？

いや、そんなことは分かつてているはずなんだ。

彼女を忘れて、何もかもを忘れて、新しい一步を踏み出さなくちゃいけないんだ。

そう、何もかもを忘れて。

だけど。

そう考えると涙が止まらなかつた。

自分でも情けないとしつけど、この涙はどうしても止まらなかつた。
そのとたんに胸が軋む。

まるで何もかもを抉り取られるかのよつなんともいえない痛み。
これがここ最近毎日来る。

間隔は決まってない。

それこそ、短いときは、ものの数分で来るし、長いときは数時間の時だつてある。

だけど、僕にとつては、その感覚なんてどうでもいい。

どちらにしろ、この生き地獄の拷問からは逃れられないことには変わりないのだから。

僕は胸をかきむしる、壁にもたれると、窓の外をむく。
そこからは、彼女の家と彼女の部屋が見える。

小さな頃は良く遊びにいった。

だけど、最近は全く行つたことがなかつた。

たぶん、それは僕が距離を置いたから。
自分の感情を知られたくないから。
もし、彼女と二人きりにでもなれば、僕は自分が何をするのかが分からぬ。

それこそ、彼女に襲い掛かる事だつてあるかもしない。

だから、行けなかつた。

行くわけにも行かなかつた。

すべては自分のせいなんだ。

臆病な僕はすべていけない。

いつそのことこのまま朽ち果ててみるのも良いかもしない。

この胸の痛みと一生付き合つていかなくてはいけないというなら。
僕はたちあがると、机の上においてあるカッターを手に取る。

この刃を出して、首に突き刺せば、そこで僕の人生は終わりを迎える。

これ以上苦しむことはない。

だけど・・・

それでも、死ぬのは怖い。

死にたくなんてない。

でも、このまま苦しみたくない。

結局僕はここでも悩むことしかできない。

行動に移せない。

やっぱり、僕は情けない。

こんな僕に彼女と一緒に居る資格なんてないんだ。

僕は、刃を出した。

そして、天井を見る。

これで見納めになるかもしれない。

いや、見納めになるんだろう。

頸動脈を切れば、そこからの蘇生はまず無理だらう。

手首を切るとは、わけが違うんだ。

それを思うと自然に力が入る。

やはり、心のどこかで恐怖しているのだらう。

これから訪れる死に対して。

僕はゆっくりと刃を首へと近づける。

だけど、近づくたびに手の震えが大きくなる。

「つーーー」

そのせいだろう、軽く刃が首筋をかすった。

ただ、それだけのことのはずなのに、ものすごく痛かった。

かすった部分に手を当てるとき、少し血が滲んでいた。

そして、その同じ血が今これからこの部屋いっぱいに飛び散る。

それを考えるとものすごく怖かった。

さつきまで握っていたカッターもいつの間にか、落としていた。

やっぱり、僕には度胸がなかつた。

僕はうなだれるようにして、その場に崩れ落ちる。

そのとき不意に携帯がかかつた。

いつそのこと無視しようかと思ったけど、僕は、素直に出た。

彼女からだつた。

そして内容は…

また、友達との事だつた。

苦しかつた。

悲しかつた。

だから、僕は…

何も言わず切ると、電源も切つた。

もう、何も考えたくなかつた。

もう、すべてを手放してしまひたかつた。

だから、僕は…

彼女と離れよう。

そして、僕はその日から彼女を避けることに専念した。

だといふのに、彼女はそれでも気がつけば僕のすぐそばに居て、彼とこのことを話していく。

どうして？

どうして、春樹は僕の居る場所が分かるの？

僕が必死になつて彼女を避けていりとといふのに、それを嘲つかのよう、気がつけば居る。

それとも、心のどこかで、彼女と居たいと思つからそつなのだろうか？

いや、それはないはずだ。

だつて、僕は彼女に何一つとして話さず、何一つとしてアクションを起こしていないのだから。

だから、大丈夫なはずなんだ。

なのに、どうして、彼女は僕のそばに居る？

そして、傍に来て、彼の話をする？

やめてくれ。

僕はそんな話は聞きたくない…！

聞きたくないんだ…！

「ねえ、聞いてるの？人が大事な話をしているときにも」「え？」

気がつくと場面は変わっていた。

いや、戻つたの方が正しいのかもしれない。

「やっぱり、きいてなかつたのね」

僕の態度があからさまだったのだろう彼女はそういうとため息をつく。

まあ、彼女の気持ちも分からぬでもない。

でも、いきなり変なことを言い出した人がいけないんだ。

いきなり、私と付き合つて、とか。

僕も彼女のことは知つていてる。

彼女は、春樹の友達の姫野椿。

春樹とは対照的にどちらかといつと落ち着いた感じのする女子。でこぼこコンビとも呼ばれてたけど、僕はそう思わなかつた。

春樹みたいな無鉄砲には、椿さんみたいな落ち着いた人のほうが合うと思つた。

きっと、いい友達でいれると思つた。

だけど、そんな彼女が僕に告白してくるなんて予想できなかつた。

どうして、僕なんかを。

そういう考え方しか浮かんでこない。

嬉しいなんて到底思えない。

それに、僕はまだ…

まだ、彼女のことが忘れられない。

だから、付き合つことなんて…

「とはいつても、あんたも素直に、うん、とはいえないでしちゃうね。なんせ振られたばかりだからさ」

「え？」

彼女が言つたことに僕は思わずびっくりした。

「いうよりも、どうして、彼女がそんなことを知つているのだろう。誰にも言つたことないの。」

それがあからさまだつたんだろう、彼女は僕の事を見るといじくりとするような笑みを浮かべると。

「分かるわよ。好きな人のことなら何でもね。それこそ、誰をいつも見てたか、なんてね」

僕は、彼女の言葉を聞いて、はつとした。

そうだ。

僕はいつも彼女のことを目で追いかけていた。
見てはいけないと思いつつも、僕は、ずっと彼女のことを目で追いかけ続けていた。

やっぱり好きだから。

この感情だけはどうしても、消せなかつたから。

だから、気がつくといつも彼女の姿を追いかけていた。

彼女に見えないとこりで。

それを、知られた。

いや、もしかすると、皆知つているのかもしれない。

そう、春樹でさえも。

そう思うと僕は、怖かつた。

体が震えてきた。

必死になつて押し隠してきた感情を見破られているかもしれない。
そう思つと、もう自分では抑制できなかつた。

自分の努力が無駄になりそうで。

「あんたつて、やっぱりわかりやすいわね」

体を抱きしめるようにして、震えていると、姫野さんが唐突に口を開いた。

けれど、それは僕にとつては更なるショックでしかない。

だつて、それはつまり、僕が考えていることを肯定していることなんだから。

そんな僕にはうなだれることしかできなかつた。

けれど、彼女はそんな僕を見ると、ため息をつくと。

「どうせ、皆に自分の気持ちを知られているんじゃないか、とか思

つてゐるんぢやないでしょ」「

あきれた感じでそう言つ。

けれど、僕にとっては驚きだつた。

「大丈夫よ。どうせ、誰も分かつぢやいないわよ。あんたは、本当にうまく自分の気持ちを隠してゐるわよ。それこそ、私だつてわからなかつたわよ。あんた、恋愛なんてどうでもよさげな反応ばかりしてゐるんだからさ」

それがまた感じ取られたんだろう、またそつとため息をつきながらそう言つ。

けれど、情けないことに僕は彼女の言葉を聞いて安心していた。誰にも知られてない。

その事実が僕に安心感を与えてくれる。

「と、話がずれてきたけど、あんたの答えを聞かせてくれないかしら?」「え?」

「だから、私の告白の答え。まあ、期待はしてないけどね」

また、ため息交じりでそう言つ。

そういうえば、今は、そつちが大事だつたんだ。

だけど、彼女の言つとおり、僕は…

「ごめん」

断ることしかできない。

けれど、それなのに、彼女はまたぞくりとするような、笑みを浮かべると。

「まあ、いいわよ。最初から答えは分かつてたし。でもさ、いつまでも引きずるわけにもいかないでしょ?だから、遊びでもいいから付き合わない?私は、気にしないし、それにそうした方が忘れやすいかもしないしね?私が忘れさせてあげるわよ?」

そう言ひ放つた。

けれど、言つてゐることはむちやくぢやだ。

そんなことができるはずがない。

たとえ、彼女のことを忘れるためとはいえ、他の人を、それこそ、自分のことを思ってくれてる人を利用するなんて。僕にはできない。

できはしない。

「そんなの…」

「できない。そんな言葉はいらないからね。できないなら、それでいいし、したいと思うなら、いつでも来て。私は、別に拒否はしないから」

彼女は僕の言葉を途中で自分の言葉で覆いかぶせるようにさうじだけ言うと、わざと戻つてしまつ。

それはまるで、僕のいうことなど聞く耳持たない。

そういうていよいよだった。

そして、その姿はどこか彼女から逃げる僕の姿にも似ていた。

「て、いつまでもこんなところに居ても仕方ないか」と、それよりも、さつさと帰ろう。

彼女も居なくなつたわけだしいつまでもこんなところにいてもどうしようもない。

僕は、彼女と同じようにここから立ち去つた。

どうしてだ？

どうして、また春樹がここに居る？

しかも、どこか僕のことを非難するような目で見ながら。

僕が何かをしたのか？

僕は何もしていない。

していないのに…

「どうして、私のことを避けるの？」

そう思いかけて、彼女の一言で思い出す。

そうたつた一つだけしていたこと。

彼女を避けること。

それが、彼女を傷つけることになつたのだろう。

だけど、

「さけてはないよ？ ただ、俺と一人で居たら、あいつも勘違いするかもしないだろ？ だから、ちょっと距離を置こうと思つただけ」それを止めるわけにはいかない。

たとえうそをついたとしても。

「そうなの？ でも、気にしないと思つけどな？ それに、私たちの仲を取り持つてくれたの、由貴^{ゆき}じゃない？」

それでも、春樹は食い下がる。

きっと、一人でも多く自分の幸せな時間のことを知つてもういたいんだろう。

だけど、それは僕にとつては拷問でしかない。

だから、避けるしかないんだ。

彼女と距離を置くしかないんだ。

ならどうすればいい？

どうすればとげが立たないですむ？

そして、唯一思い浮かんだのは…

僕が一番嫌いな…

卑怯な方法だつた…

そう、それは…

「それにさ、俺、今付き合つてゐる人が居るんだ。だから、やつぱり、ほかの女の子とふたりきりでいるのはまずいよ」

姫野さんを自分の彼女に仕立て上げることだった。

春樹がびっくりしたような顔をする。

「春樹の友達の姫野さんなんだ。この前告白されて、オーケーだしだ。二人とも友達だから、大丈夫かもしないけど、僕としては、けじめはつけておきたいからさ」

そんな春樹をほうつておいては俺はどんなうそをつく。

だけど、何も感じない。

麻痺しているのかもしない。

痛みも悲しみも何もかもを失つてしまつたから。

たつた一度の恋に破れたというだけで。

「だから、『ごめん』

最後にそう謝つておく。

上つ面だけなら、綺麗事なのかもしれない。

けれど、本当の意味は…

真意はどこにあるのだろう?

僕自身にさえ分からぬ。

ただ、言えるのは、どっちにしろ、彼女には何も知らせられないこと。

それが僕にとって唯一の救いだから。

そして、僕はすぐ傍にあるかばんを取ると、教室を出る。

これ以上彼女の顔を見たくはなかつた。

もし彼女が僕に彼女ができたことを喜んでいたら…

それを考へると、どうしようもなく怖かつた。

だから、僕には逃げるという選択肢しかなかつた…

そして、僕と姫野さん 椿は付き合つことになつた。

彼女は自分の逃げ道のためにこのことを使つたことについて何も言わなかつた。

それどころか逆に喜んでいた。

どうして?

どうして、そんなに喜べるのだろう?

僕は、彼女のことなんとも思つていない。

ただ、自分の逃げ道のためだけに利用しているといつのこと。

なのに、どうして、こんなに嬉しそうにできる。

僕には分からぬ。

全く分からぬ…。

「ほり、由貴、何考え込んでるのよ。せつかくのデートなんだから、

楽しまなきや損でしょ」

彼女は本当にうれしそうにしている。

僕の心がこんなにも虚無感で満たされているのに。

なのに、彼女は、それでも楽しいといえるのだろうか？

それで満たされているのだろうか？

僕には全く分からぬ。

彼女の心が予測つかない。

「て、ほら、こっちにきなさい、てば」

彼女がぼんやりとしている僕の腕をつかむと、ベンチに座らせる。今日は公園に来ている。

彼女が手料理を振舞つてくれるらしい。

普段は凛として、寄せ付けないような雰囲気を持っているのに、今日は違う。

いや、僕の前だけでは違う。

僕の前だけでは、甘えるようなじぐれをする。

これが本当の彼女なのだろうか？

それとも…

「ほら、口を開けて？あーん。」

そんな僕の思考を払拭するかのように、自分の手料理を僕に差し出す。

けれど、僕には見えた。

彼女の瞳の奥で悲しみで揺れています。やつぱりつらいんだ。

だけど、それでも僕のそばに居ようとする。

どうして、そこまで僕のことを想うのだろう？

大してかつこよくない僕のことを。

「あーん」

だから、逆にそれがつらい。

ここまで思つてもらつてするのがつらい。

だから、彼女がすることは素直に受け入れるしかない。

それが僕にできるせめてもの贖罪。

彼女が笑う。

幸せそうに。

だけど、その瞳には相変わらず、深い悲しみで彩られている。
どうして？

これは椿が望んだことじゃないのか？

僕は君の思つとおりに動く。

君を否定することはしない。

拒否だつてしない。

なのに、どうして、そんな悲しい日をするの？

分からぬ。

どうして？

僕が悪いのか？

じゃあ、一体僕の何が悪いんだ？

教えてくれ。

だれか、教えてくれ。

僕はいつたい何を間違つてゐるのかといふことを。

椿樹が別れた。

どうしてか分からぬ。

でも、予想はつく。

また、いつものこと。

自分が思つていたのとは少し違つた。

自分が感じていたのとは少し違つた。

だから別れた。

それなんだと思つ。

いつものこと。

そう、いつものことなんだ。

隣には、椿が居る。

ここ最近、ずっと何かにおびえるように僕の腕をつかんでいる。
まるで、僕が逃げていくのを恐れるかのよう。

僕は逃げやしないのに。

どこにも逃げることなんてできないのに。

それによつやく彼女になれてきた。

だから、もう、春樹のことも大丈夫だと思つ。

もう、引きずつてなんかいない。

だから、大丈夫だと思う。

これからは、椿の事を見ていける。

椿のことを好きでいられる。

そうだと思う。

「ねえ？私は由貴の事好きだよ？」

そういうえば、こういう言葉も多くなつたような気がする。

「ねえ、由貴も別に私のこと嫌いじゃないよね？大丈夫だよね？」

何が不安なのだろう。

必死になつて僕の腕にしがみ付きならそう訊ねてくる。

「うん」

だから、僕は頷くことしかできない。

彼女のことを見たくないなつた。

彼女により抱えられたから僕は今こいつしているんだ。

つらい思いをしなくても良いんだ。

けれど、椿は僕がそう頷くたびにつらそうな顔をする。

その瞳に深い悲しみを漂わせる。

どうして？？

どうして、君はそんなにつらい顔をするの？

これを求めているんじゃないの？

これじゃいけないの？？

僕には分からない。

だから、彼女のことを抱きしめる。

僕にはそれしか手段を知らない。

彼女の不安を払拭する手段を。

だけど、それでも、彼女の不安は消えない。

体が震えている。

なぜそんなに怯える?

何をそんなに不安がっているんだろう?

僕には分からぬ。

僕には…

「…由貴」

不意に背中から聞き覚えのある声がした。
彼女のこと抱きしめながら振り返る。

そして、そこに居たのは…

「…春樹」

春樹だった。

彼女が僕の事を見ている。

どこかその目は非難するように見える。

どうして?

また僕が何かしたのか?

もしかして、僕のせいで別れたとでも言つのか?
だから、それに対して文句を言いにきたのか?

だけど、僕は何もしてない。

だから、何も…

「え?」「

ふと気がつくと、僕の腕の中に居る彼女の、椿の体の震えが強くなつていた。

どうして?

更なる疑問が浮かんでくる。

だけど、分からぬ。

僕には何がどうなつてているのかぜんぜん分からぬ。
椿が怯えているのも、春樹が怒るのも。
何も分からぬ。

僕は立ちすくむことしかできない。

どうすれば良いのか全く分からぬ。

何がどうなつてゐるのか分からなかつたら。

「て、え??」

何もできずに僕は立ち尽くす。

けれど、彼女は、椿は僕の腕をつかむと、走り出す。まるで、春樹から逃げ出すようだ。

どうして?

二人は仲のいい友達じゃなかつたのか??

それともそれは単なる僕の勘違いだつたのだろうか? 分からない。

たぶん、きっと、僕のわからないところで、何かが進行してゐるんだ。

しかもそれはきっと、簡単に済むようなことぢやないんだと思つ。なぜだか分からぬけど、そなんだと、僕は思つ。

かなりの距離を逃げるようにして走つてゐた彼女は、いつも別れる交差点で立ち止まつた。

お互ひ、運動部に入つてゐるわけでもないので、息切れをしている。特に彼女の方がひどい。

普段の彼女には似合はず、落ち着きのないそぶりで、肩で息をしてゐる。

こんな彼女を見るのは初めてだ。

いや、もしかすると、これが彼女の本当の姿なのかも知れない。

今まで僕が勝手に思い込んでいた姿のほうが、偽者なのかも知れない。

まあ、どっちが正しいのかなんて分からぬけど。

僕は、傍にある壆にもたれかかり、息を落ち着ける。彼女と同様に僕だつてかなりきつい。

抱き合つてゐる姿を彼女に見られたのだ。

つらくなはづがない。

たぶん、まだ、彼女への気持ちが残つてゐるせいだ。

早く忘れなければ。

そうしなければ、もつと辛くなる。
もつと、悲しくなる。

だから、早く忘れなくちゃいけない。

そして、早く椿のことを好きにならなくちゃいけない。

そうじやないと報われなさ過ぎる。

彼女の気持ちが。

僕はある程度息が落ち着いてきたのを確認すると、空を見上げる。
茜色に染まつたそこは、どこか悲しみに満たされた正在見つめているよつに見える。

まるで、これから、不吉なことが起じることを暗示してこむかのように
うだ。

そこまで考えて頭を振る。

そんなことは考えてはいけない。

そんなことを考えていては、状況はさうに悪くなるだけ。
悪くしかならない。

だから、いいように考えなくてはいけない。

いけないんだ。

視線を椿へと戻す。

けれど、視線の先に、椿はいなかつた。

ただ、その代わりに胸に重みを感じるだけ。

彼女の重みを。

「どうしたの？」

初めてのことだった。

彼女から抱きついてくるのは。

手をつなぐことはあった。

腕を組むときもあった。

ただ、彼女から抱きついてくることは一度もなかつた。

それがあたかも最後の砦かのように、それだけは決してしなかつた。
なのに、今、彼女は僕の腕の中に居る。

必死になつて僕にしがみつく彼女が僕の腕の中にいる。
なぜ??

くるのは喜びではない。

純粹な疑問だけ。

彼女のしていることがどんどん分からなくなる。

最初は。

それこそ、告白をしていたときはあんなに自信に満ち溢れていた
いうの。

どうして、今はそんなに怯えてるの?
何にそんなに怯えてるの?

分からぬ。

分からぬから僕には何もできない。

抱きしめることすらできない。

ただ、突然と立ち尽くすことしかできない。
彼女のこと拒絕もできず。

ただ、漠然とした不安を抱えながら。

ただ、時間が過ぎて、彼女が僕から離れるまで。
「見つけた」

それはきっと、半永久的なもので、かなり長いもの。
そう思つていた。

そうなるものだと思つていた。

だけど、僕らの時間を壊す人が居た。

いや、壊してくれた方が良かつたのかもしれない。
このどうしようもない雰囲気を払拭するには。

「春樹、どうしたの?」

僕は、この時間を壊した人、春樹に尋ねる。
けれど、春樹は何も答えない。

ただ、僕と、そして椿を見るだけ。

そして、椿も何も言わない。

ただ、春樹の視線から逃げるように、僕にしがみつく。

この「一人の間には何かある。

先ほど感じた予感が確信に変わる。

僕の知らない何かが、あるんだ。

僕はそつと、抱きついている椿をかばうような形で前に立つと、
「そんな目で、どうして、椿を見ているんだ？」

確信をつく問い合わせをする。

二人がはつと息を呑むのが分かつた。

けれど、僕はそれをあえて無視をすると、春樹のこと見つめる。
どうしてこんなことになつてしているのかははつきり言つて予想がつか
ない。

ただ、唯一いえるのは、僕がすべきことは…

今の僕のすべきことは、椿を守ること。

ただ、それだけなんだ。

それが伝わったのかもしれない。

椿が安堵の息を吐き、春樹は唇をかみ締める。

その目は、その瞳が僕のことを非難がましく見える。
でも、これは当然のことだろう？

僕は椿の恋人。

ならば、椿を守らなくちゃいけない。

たとえ相手が初恋の人だつたとしても。

「ねえ、確か二人とも仲のいい友達だつたはずだよね？なのに、こ
れはどういうことなの？」

これはきっと彼女にしてみれば、自分が責められているとでも感じ
るだろう。

たとえ、僕にとつては単なる問いかけのつもりでなかつたとしても。

「……」

彼女は何も答えない。

答えられないのかもしない。

もしかすると、自分にとつて不都合なことのかもしないから。

また攻められるかもしないと思うから。

春樹は何も言わない。

そして、椿は何も言わない。

ただ、沈黙で満たされるだけ。

何もない。

何もかもが消えてしまつたかのようだ。

あたかもこの世界には、この三人しかいないかのようだ。

ただ、静かだつた。

誰も答えない。

誰も答えられない。

僕も、春樹も、椿も

誰も答えられない。

ただ、沈黙しかない。

誰もが答えるすべを知らないかのようだ。

誰も答えない。

ならば。

誰も答えられないな。

「俺たちは、帰るよ」

この無駄な時間をなくせばいい。

こつすることで、時間は動き始める。

それがいいとも悪いともつかない方向へと

動き始める。

僕は椿の手をとると、彼女の家の方向へと向かつ。

今の状態で彼女を独りにするのは危険だと思ったから。

彼女もそれに安心したんだろう、僕が握っている手を振り解くと腕を組み、体を密着させる。

そして、さらに寄りかかつてくる。

それはまるで、春樹に見せ付けているかのようだ。

どうして、そんなことを…

そう思いかけたとき背後から声がした。

僕の名前を呼ぶ春樹の声が。

振り返る。

そこにいる春樹は、今にも泣き出しそうな顔をしていた。
そんな春樹の顔は一度しか見たことがない。

二人で飼っていた。

内緒で飼っていた小鳥が死んでしまったとき。
そのときだけしか見た事がなかつた。

どうして、そんな顔をする？

何がそんなに悲しいんだ？

だけど、僕には何もいえない。

言う資格なんてない。

もう、僕は、彼女とは、春樹とはなんでもないんだ。
単なる幼馴染だった。

それだけ…

「私は、由貴のことが好き！！いまさらだけど、気づいた。由貴が離れて行つてようやく気がついた。由貴が居ないと、どうしても不安になつてしまつてことが。だから、私は由貴のことがすきなんだと思う。ううん、好きなの…！」

それだけのはずだった。

なのに、また変わり始める。

この局面にきて…

ようやく落ち着き始めたと思つた局面に入つてきたというの…。
また、荒れ始める。

こんな僕たちを嘲笑うかのよつて。

壊れ始めたんだと思う。

すべてが。

当たり前のようにあつたものすべてが音を立てて崩れ始めた。
椿が全部話した。

自分がしたことを全部。

それを始めて聞いたとき僕には何がなんだか分からなかつた。

むしろ、なぜそこまで僕に執着するのかが全く分からなかつた。でも、どうしてこんなふうになつてしまつたのかは分かつた。

すべては、やっぱり彼女の言つとおり彼女のせいだつた。

そう、椿はいろんな人の感情を利用したのだ。

椿は全部知つていた。

僕が春樹のことを好きで、だけど、今の関係を壊したくなくて告白できないでいることを。

僕の友達が春樹のことを好きだということを。

春樹が、惚れっぽい性格であることも。

そして、本当は春樹が誰を好きなのかといつことも。

だから、利用した。

皆の感情を。

春樹と僕の友達をくつつけさせる。

その際に僕の手を借りること。

そうすれば、僕は苦しむことになる。

自分の手で、好きな人を他の人とくつ付けるのだ、そうならないはずがない。

そして、春樹の事もある程度マインドコントロールした。

春樹は惚れっぽい。

だから、ちょっとその僕の友達のことをほめて、関心を持たせる。

そして、ある程度関心を持たせたところで、一気に引き合わせる。

僕が知らないところで、椿経由で一人を合わせる。

そして、春樹はその人の新たな一面を見つけて、さらに惹かれていく。

さらにつめとして、僕にその友達について聞く。

僕には、その友達のことをよくしかいえないから。

幼馴染という関係で居るなりば。

そして、めでたく付き合つことになれば、今度は、僕に矛先を変える。

春樹にのろけ話を僕にするようにとこうのだ。

まあ、一人をくつ付けたのは、僕のおかげなんだから、とでも言って言いくるめたのだろう。

そして、それにまんまとせられた、春樹は僕に話し始める。もちろん、それは僕にとっては、それは酷でしかない。

よつて、避けることを選ぶ。

けれど、そこでまた、椿が手を加えた。

彼女には豊富な情報網があった。

彼女の交友関係はずつと広い。

だから、僕の居場所を見つけることなんて簡単なことだった。

そして、見つけたら、春樹に教える。

後は、僕が精神的にぼろぼろになるのを待ち、ある程度ぼろぼろになつたら、後は最後の一押し。

今度は逆に春樹に教えない。

そうすることで、自分が避けられていることを知り、少なからず、気持ちが揺らぐ。

もちろん、そのときに自分の気持ちに気づく可能性があるかもしれないが、その可能性は低い。

彼氏という存在が居るからだ。

そして、気持ちが揺らぎ不安定なつた春樹は僕を非難する。

心当たりのある僕はそれによってかなりの精神的ダメージを受けることになる。

結果として、僕はぼろぼろとなり、一人では立つていられなくなる。後は、そのぼろぼろになつた僕にあたかも救いの手を差し伸べるかのように、告白をする。

ぼろぼろになつてしまつた僕には正常な思考はなくなつてしまつている。

だから、後はどうにでもできる。

現に、僕はあの時彼女を受けいれた。

少々変則的な形かもしれない、というよりも、順序がかわつてしまつているけれど、これが彼女が描いたシナリオ。

僕を手に入れるために行つた三文芝居の真実だつた。

そして、僕はそれを聞いたとき、何よりも彼女のことを持れに思った。

そうすることでしか自分の思いを告げられなかつたから。

そして、それと同時にうらやましかつた。

そこまでして、自分のものにしようとしていたから。

でも…

それを聞いてしまつた以上、もう一緒ににはいられない。

きつとこれ以上一緒に居れば、余計に彼女のこと苦しめるだけだ

と思う。

きつと彼女は僕と一緒にいる限りずっと自分の罪にさいなまれ続けなくちゃいけない。

だから、一緒に居るわけにも行かない。

けれど、だからと書いて、簡単に春樹の元にも戻れない。

そうすれば、きつと椿はまた苦しむ。

僕にはどちらを選べばいいのか分からぬ。

ただ、漠然とこのままではいけないと思うだけ。

どちらかを選ばないといけないといけないだけ。

そして、それは自分の気持ちが向かっている人じゃないといけない。

今、僕が好きなのは、どちらなのか。

それを明らかにしなくちゃいけない。

初恋の人か、それとも利用してでも僕のことを手に入れようとした人か。

どちらなのか、ということを。

みんなならどうする？

どちらを選ぶ？

どちらを選びばいいと思う？

ねえ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0163d/>

続・小さな恋

2010年10月16日03時47分発行